



プークは、いくつもの宮沢賢治作品を、戦後の劇団再建公演など節目で上演し続けてきました。その長年の取り組みが評価され、花巻市より2022年第32回「アイハトーブ賞」を受賞しました。



宮沢賢治原作「オッペルと象」より

# オッペルと象

脚色・演出／井上幸子 美術／若林由美子  
音楽／マリオネット（湯浅隆・吉田剛士）  
照明／増子顕一（SLS） 音響効果／吉川安志

南の国のある村。農場では傲慢な地主オッペルに虐げられて働く百姓たちがいた。そこに新しい世界を求めて群れを離れた白象がやってくる。初めは働くことを楽しんでいたが、百姓の仲間には入れてもらえず、食事のわらも日に日に少なくなっていく。体力も気力も衰えた白象は…。

「若者が未来の力です」

脚色・演出／井上幸子

昔々？11.2歳の頃にプークの『オッペルと象』を観ました。舞台は衝撃的で、白象を助けに仲間の象たちが力一杯走るシーンは、今でもはっきりと覚えています。

…月日は経ち、2019年の劇団創立90周年記念公演で『オッペルと象』の脚色・演出を担当することになりました。不思議な巡り合わせです。

大きくは4回目となる今回の舞台は、脚本から新たにしました。白象の設定を明確にし、自分の力を試してみたい若い白象の想いから始めました。お百姓さんたちの役に立ちたいと張り切った行動は空回りしてしまい、白象の葛藤の日々が続きますが、白象に想いを寄せる少年ポポとの出逢いがあり、自らも考えていきます。考えを巡らせ続けることで段々とオッペルの魂胆や、目の前の大事なことが見えてきます。

「働く喜びとは何か」「自由とは何か」「本当の仲間とは何か」白象やポポと共に悩み、考え、応援してください。

白象の構造をはじめ、プークの財産である「黒の劇場」（照明や操作者の工夫により人形のみ浮かびあがります。）など、人形劇ならではの魅力を味わっていただきたいと、心から願っています。